

金子みすゞ論

— 成長過程における子どものつぶやき —

A Study of KANEKO Misuzu

長 田 真 紀

Osada Maki

要 旨

金子みすゞの童謡詩のなかから、成長過程の子どもの心のつ
ぶやきを作品化したものを取り上げ考察した。

化した。

本稿では、金子みすゞのいくつかの作品を取り上げ、みすゞが描
いた子どもの心のつぶやきについて考察を試みたい。

Ⅱ

【キーワード】…金子みすゞ、子ども、成長、言葉

Ⅰ

子どもは日々の成長過程のなかにあつて、身体的発達、知的発達、
情緒的発達、社会性の発達、人格的発達などがなされる。

金子みすゞは、子どもの発達過程における、驚き、発見、不安、
かなしみ、恐れ、喜び、等の瞬間を見事にとらえ童謡詩として作品

おとむらひの日^ひ

お花や旗^{はな}でかざられた

よそのとむらひ見るたびに

うちにもあればいいのにと

こなひだまでは思つてた。^{おも}

だけでも、けふはつまらない

人は多^{おほ}ぜいゐるけれど^{ひと}

たれも對手にならないし
都から来た叔母さまは

だまつて涙をためてるし
たれも叱りはしないけど
なんだか私は怖かった。

お店で小さくなつてたら
家から雲が湧くやうに
長い行列出て行つた。

あとは、なほさらさびしいな。
ほんとにけふは、つまらない。

「おとむらひの日」(大正十三年二月「童話」(佳作))は、死というものの意味をまもなく認識するであろう直前の頃の子どもの様子をとりえた作品である。

死をまだ認識できない段階の子どもは、昨日までかわいがっていたイヌやネコが死んでも、涙ひとつこぼすことなく、好奇心から喜んで庭に埋めるのを手伝う。あるいは、親を亡くしてもその意味がわからず、葬儀に集まった人々の前で無邪気にはしゃぎ、それがかえって参列者の涙を誘ったりする。

この詩の子どもは、つい先日まで、たくさんの献花や幟で飾られる「おとむらひ」の華やかさ(この場合、西日本、とりわけ中国地方でおこなわれる葬儀のイメージを思い浮かべる必要がある)に強い興味を抱き、私の家でもあればいいのと思っていた。ところがいざ実際に自分の家に「おとむらひ」があつてみると、おおぜいの

大人が集まっているにもかかわらず誰も遊び相手になつてくれないし、都会から久しぶりにきた叔母は涙をためているばかりだし、私がさわいでも誰も叱らない。さぞかし楽しいことだろうと想像していた「おとむらひ」は、なんだか怖く、さびしく、そしてつまらないものだった。

この子どもは、この新しい経験を通して、「おとむらひ」というものが、単なるにぎやかなお祭ではないことに、気づいたのである。しかし、大人たちの表情やその場の雰囲気怖さ、自分だけがとり残されたさびしさやつまらなさが、いったいなにに抱えるものなのか、つまり「おとむらひ」の本当の意味はまだ理解できない。「うち」にあつた「おとむらひ」であることは知つていても、子どもの関心は、叔母をはじめ集まつてきた人々にばかり向けられ、その大人たちがいつこうに自分の相手になつてくれない、という自己中心的な思考にとどまつている。だから、いったい誰の「おとむらひ」なのか、全く気づいていないのである。その時点において、確実に「うち」の誰かの存在がすでに消えてなくなつてしまつていくというのに。

その後、この子どもは成長とともに、命ある存在は必ず死を迎えねばならないこと、死んでしまつたら二度とこの世には存在しなくなつてしまふという、死の絶対性を認識していくことになるだろう。そして、「うち」にあつた「おとむらひ」が、いったい誰のものであつたのかも知ることになるだろう。

この作品は、死の認識過程の入り口に立つたひとりの子どもとまどいを、見事に描いている。

みすゞにとって死との最初の出会い、それは父・金子庄之助の死であった。

矢崎節夫氏の『童謡詩人 金子みすゞの生涯』^①を参照しながら、伝記的事項をおさえておきたい。

庄之助（明治七年十一月二十七日生）は、代々の網元であった石津助四郎とリンの四男（九人きょうだいの末っ子）として山口県大津郡通村に生まれた。金子ミチ（明治八年一月一日生）と結婚後、金子姓を名乗った。明治三十四年十二月六日に結婚届けが出され、同年十二月十二日に長男の堅助が誕生。長女のテル（みすゞ）は、明治三十六年四月十一日、大津郡仙崎村で生まれた。庄之助は二十八歳、ミチも二十八歳であった。明治三十八年二月二十三日、次男の正祐が誕生。

この頃まで、庄之助は、渡海船の仕事をしていたが、ミチの妹・フジが嫁いだ上山松蔵（下関の上山文英堂書店主）に頼まれ、清国営口永世街に開店した同書店の支店長として赴任した。ただし、庄之助が渡清した正確な時期はいつだったのか、妻・ミチや三人の子どもたちが、たとえ一時的にしろ営口の庄之助のもとに行ったことがあったのか、などは一切詳らかになっていない。

さて、庄之助は、営口に渡ってまもない明治三十九年二月十日、清国人によって殺されてしまう。この事件も詳細は明らかにされていないが、日清戦争（明治二十七年～二十八年）、日露戦争（明治三十七年～三十八年）後、現地の反日感情の昂まりと情勢の悪化のなかで、不運にも庄之助は犠牲になったのである。庄之助は満三十一歳。みすゞはあと二カ月で満三歳だった。

軍人でも政治家でもない庄之助が殺されたことは、まことに悲劇というほかはない。矢崎節夫氏はその原因を、「反日運動をしていた清国の人たちにとって、本屋は日本の文化の流入口と見なされ」たことによると述べている。庄之助の死は大陸進出という日本の近代史の足跡と明らかに繋がるものであり、それゆえ、みすゞの生もまたその影を背負っている。

さて、三歳を目前にしていたみすゞは、父の死を認識できたであろうか。おそらくその意味を知るには、もう数年待たねばならなかったはずであり、殺害された父の死の複雑さを本当に理解したのは、かなり成長してからのことだろう。

庄之助の葬儀がどこで営まれたかは不明だが、作品「おとむらひの日」を、父の「おとむらひの日」におけるかつてのみすゞ自身の姿を心象風景化したものとしてとらえることも不可能ではない。あの日、何も知らなかった自分。そしてなぜかわからないけれど、確かに感じられた不安やとまどい。

昭和五年三月十日、二十六歳のみすゞは、三歳四カ月の一人娘ふさえを遺してカルモチンによる服毒自殺を遂げる。はからずも今度、ふさえが、母・みすゞの複雑な死を認識していくことになるのである。

III

口眞似

—— 父さんのない子の唄 ——

「お父ちゃん、

をしへてよう。」

あの子は甘えて

いつてゐた。

別れてもどる

裏みちで、

「お父ちゃん。」

そつと口眞似

してみたら、

なんだか誰かに

はづかしい。

生垣の^{いけがき}

しろい木槿が^{むくげ}

笑ふやう。

「口眞似」（初出誌不明）は、副題に記されているとおり、まさに「父さんのない子」のひそやかなつぶやきである。

この子どもには、死別か生別かは不明であるが、ともかく父親がない。そして、その事実をすでにこの子は十分承知している。

「おとむらひの日」で登場する子どもよりも、明らかに年齢は上である。幼児というよりは、児童と呼ぶにふさわしい年齢だろう。

遊びにいった友達の家で、友達が宿題の答えか本の読めない字を

父親に聞いたのであろうか。「お父ちゃん、をしへてよう。」と何げなく甘えて言った友達の言葉が、この子どもの心に沈み込む。帰り道、「お父ちゃん。」と、そつと口まねを試みる。誰にも聞かれていないはずなのに、なんだかそつてもはずかしい。そんな子どもを、生け垣の白い木槿の花があたたく見守っている。

「あの子」にとって父親に甘えることは、当たり前でなんら特別なことではない。一方、「父さんのない子」にとっては、もはや直接、父親に「お父ちゃん。」と呼びかけることは不可能なのである。「父さんのない子」は、自分には父親がいないことを、学校や地域などさまざまな場所や機会において、繰り返し自覚させられる。なぜ自分には父親がいないのか、という問いかけを、たとえば当初は母親や他の家族に投げ掛けたとしても、次第にそのことは子どもの心の奥にそつとしまい込まれていくのである。この作品の子どもも、家に戻ってから家族の前で「お父ちゃん。」と口に出すのではなく、あくまでも帰りの裏道でこつそりとつぶやいてみるのである。

第三聯の「しろい木槿」は、寄る辺ない子どものかなしみやさびしさを知っている唯一の存在として、やさしくほほ笑みかける。ここには、自然は人間を、とりわけ子どもを、深く包み込む存在であるという、みずゝの自然観が如実にあらわれている。

ある人間にとっては、ごく当然のことが、別の人間にとっては、たとえどんなに努力をしようとも絶対的に叶わない不可能なことである、ということが存在する。この詩の場合は、父親の喪失という問題であるが、障害や経済的な問題などさまざまな場合がありうるだろう。しかしながら、子どもがその厳しい現実を知り、自分のな

かにある欠落感を自覚した時、確かにその子どもは成長を遂げることになるだろう。

みすゞの人生に即して言うならば、満三歳になる前に父を亡くしたみすゞが、おそらくこの詩の子どもと同じような思いを何度もしたであろうことは容易に想像できる。みすゞの父・金子庄之助は広義における日露戦争の犠牲者であったわけだが、日露戦争で、あるいはその前の日清戦争で、父親を亡くした子どもにとっても同様だろう。

前述したように、みすゞの娘ふさえも、親（母）を亡くした子どもとなるのである。いつの時代になっても、父親（母親）を病で、事故で、災害で、事件で、戦争で、自死で、亡くした子どもが多いことか。

この詩の子どものように、「お父ちゃん。」と、そつと口まねしてみる子どもはいつも世界中にいる。

IV

ばあやのお話

ばあやはあれきり話さない、

あのおはなしは、好きなのに。

「もうきいたよ」といつたとき、
ずあぶんさびしい顔してた。

ばあやの瞳には、草山の、
野茨のはなが映つてた。

あのおはなしがなつかしい、
もしも話してくれるなら、

五度も、十度も、おとなしく、
だまつて聞いてゐようもの。

「ばあやのお話」（初出誌不明）は、自分が無意識のうちについ相手を傷つけてしまった、取り返しのつかないことをしてしまった、ということに気づいた子どもの内省のつぶやきである。

私のことを小さい時から慈しみ、なにくれとなく世話をしてくれたばあや（子守の老女）は、いつもきまつて昔話をしてくれた。ばあやはまるで、ふるさとの草山の野茨や花をいま目の前に見ているかのように、いきいきと昔話を語ってくれた。ばあやから繰り返し繰り返し聴いたあの話は、大好きだったはずなのに、ある日ふと「もうきいたよ」と、言ってしまった。その時ばあやはとてもさびしい顔をして、その後は二度とあ話をしなくなってしまった。もしまたばあやが話してくれるのなら、今度は何度でもずっと聴いているのに。

前読書期と呼ばれる時期において子どもは、同じ話を繰り返し聴くことを楽しみにし、毎晩同じ絵本を読んでもくれるようせがむことが多い。

この詩の子どもも、ついこの間まではそうだったのである。ばあ

やの語る昔話をおもしろがり、何度も何度も話をねだった。ばあやも、喜んで聴く子どもを前にし、自分のふるさとの昔話や思い出を、繰り返し語ったのである。

しかし、同じ話を繰り返し聴いて喜ぶ時期は過ぎた。ある日、子どもは、ばあやから聴く同じ話にたいくつさを覚え、「もうきいたよ」と、言ってしまったのである。同じ話を聴くことよりも、新しい話を聴くことや自分自身で本を読むことに興味が湧き、好奇心を持つ時期に移ったのである。まさに、この子どもの明らかな成長である。

さらに子どもは、「もうきいたよ」と言った自分の言葉に、ばあやが寂しそうな顔をしたこと、そして、あれ以来もう昔話をしなくなっただけに気づく。

自分の言葉で、大好きなばあやをがっかりさせ、傷つけてしまったことに本当の意味で気づいた時、はじめてこの子どもの心が深まり、精神的な成長を果たすのである。

本心からおもしろがって、同じ話を何度も聴くのと、ばあやを傷つけないためにずっと聴いているのでは大きく意味が異なる。

この詩の子どもは、ばあやという保護から巣立ちをし、一方的に愛情を注がれるものから、他者を思いやり、愛情を与えることができるものへと成長する過程にある。

V

犬

うちのだりあの咲いた日に

酒屋のクロは死にました。

おもてであそぶわたしらを、
いつでも、おこるをばさんが、
おろおろ泣いて居りました。

その日、學校がくこでそのことを
おもしろさうに、話してて、

ふつとさみしくなりました。

「犬」(初出誌不明) もまた、他者の心の痛みに無自覚だった自分に気がついた子どもを詠んだ作品である。

うちの庭にはダリアの花が咲き、なんとなくうきうきした気分その日に、酒屋の犬のクロは死んだ。いつも子どもたちにガミガミ小言ばかり言う酒屋のおばさんが、この日はすっかり悲しみに暮れ泣いている。その様子を学校で友達と話ながら痛快に思っていたところ、急にさみしさに襲われた。

第一聯から、小さいながらもこの世の不条理が端的に表現されている。私にとってはダリアが咲いた喜びの日(明)、酒屋では犬のクロが死んでしまった日(暗)。

子どもたちにとってけむたい存在の酒屋のおばさんが泣いているのを見て、おもしろがってしまったところには、無邪気な子どものなかにも一種の残酷性が潜んでいることを、決してみずぐは見

逃していないことを物語る。

しかし子どもは、クロがおばさんにとって大切な存在であったことと、そのクロを失って、おばさんが涙を流して悲しんでいることに気づく。その瞬間、おばさんの心の痛みを感じとり、それを笑ってしまった自分の心にチクリと痛みが走るのである。自分の心のなかに潜んでいた意地悪な気持ち、それを、おばさんの涙によつてはたと気づかされる。

この気づきこそ、罪悪感、恥ずかしさ、の端緒となるものであり、他者の立場にたつことの第一歩となるものである。

VI

そのほか、成長過程にある子どものさまざまな様子をとりえた作品をいくつか見てみたい。

「小さなうたがひ」（初出誌不明）は、自分ひとりだけが、「女のくせに」と叱られたことで、兄はこの家の子だけれどあたしはよその家の子なのではないかという疑問が語られている。大人が考える以上に子どもは自分の出生に深く関心をもっており、なにかにつけそこに結びつけて考える時期がある。親の対応がきょうだいと自分とは違っていた場合、実に敏感に察知し反応する。きょうだいは家庭のなかで、最初の比較対象者となるからである。加えてこの場合は、女の子ということで親の対応が違っていたということに気づき、そのことを不満に思っている子どもの声を、みすゞはしっかりと

と汲みとっている。

「^{まつげ}睫毛の虹」（初出誌不明）もまた、自分がこの家の子ではないのではないかと思ひ込み泣いている子どもを詠んでいる。しかし、同時にこの子どもは「まつげのはしの／うつくしい、／虹を見い見い」思っている。つまり、泣いている自分、「もらひ兒」かもしれないかわいそうな自分に自己陶醉しているのである。子どものなかに芽生えたナルシズムを、みすゞは看破している。また、そうこうするうちに子どもの関心は「けふのお八つは、／なにか知ら」と、おやつに移っていく。子どもの気持ちの移り変わりの早さ、それゆえに子どもの心理や、子どもの存在そのもののおもしろさが伝わってくる作品である。自分の出生を深刻に考えて泣いていたにもかかわらず、いつのまにかおやつ（食べ物）のことを考えている姿に、子どものもつ生命力、なにかを乗り越えて生きていくたくましさを感じずにはいられない。

「お菓子買ひ」（初出誌不明）は、母に内緒で買い食いをしようとしている子どものころの逡巡が巧みに詠まれている。親に秘密をもつことに後ろめたさを感じながら、かといって、やってみないではいられない子どもの緊張感が手に取るように伝わってくる。

「誰がほんとを」（初出誌不明）は、自分の容姿や性格について気になりだした子どもを詠んだものである。

「私は、かはいいい、いい子なの、／それとも、をかしなおかほな

の。」そのことをぜひ知りたい、誰かに聞いてみたい。でも、「誰がほんとをいふでせう、／わたしのことをわたしに。」

自分はこういう子なのか、周囲のひとはどうみているのか。まさにこれは、子どもの自我意識の出現である。鏡ばかりみて、自分の顔をしきりに気にする時期がある。自己を客観的に見る、自己を対象化する前段階でもある。自分に対する自信も、インフェリオリティーコンプレックスも、かなり小さい頃から子どもはもちはじめるものである。

子どもは、人生の入り口に立っているながら、すでにもう生の深淵をどこかで感じとっているような不思議な生きものである。決して後戻りのきかない人生を、子どもは一步一步自分の足で踏み固めながら成熟へと向かっていく。それは、かつて大人たちも通過してきた、そして子どもたちも必ずや通過する時空である。

その過程において見せる子どもの表情やこころの動きを、詩人金子みすゞは鮮やかに描ききった。成長過程のなかで、子どもが有声無声に発するつぶやきを、珠玉の言葉で綴ったのである。

※金子みすゞの作品の引用については、新装版『金子みすゞ全集』Ⅰ、

Ⅱ、Ⅲ（一九九五年二月 第一四刷 JULA出版局）に拠った。

注

(1) 一九九四年七月 第五刷 JULA出版局

(2) 前掲(1)に同じ。

(3) 庄之助の墓は仙崎の遍照寺にあり、みすゞもまたそこに眠っているという。(矢崎節夫『童謡詩人 金子みすゞの生涯』前掲(1)に同じ。)